

氏 名 濱 島 敦 俊

学位（専攻分野） 博士(学術)

学 位 記 番 号 総研大乙第100号

学位授与の日付 平成14年9月30日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 題 目 総管信仰-近世江南農村社会と民間宗教-

論 文 審 査 委 員 主 査 教授 塚田 誠之
教授 立川 武藏
助教授 横山 廣子
教授 末成 道男（東洋大学）
助教授 三尾 裕子（東京外国語大学）

(別紙様式3)

博 士 論 文 要 旨

平成13年6月20日

申 請 者

住 所 台湾 南投縣埔里鎮大學路29號

氏 名 濱 島 敦 俊 (はましま あつとし)

0) 題目：総管信仰—近世江南農村社会と民間宗教

1) 対象：長江下流域の江南デルタは、唐末五代から低湿地開発が進み、概ね10世紀以降の中国近世の、経済の発展・拡大を牽引してきた先進地域である。その地の住民、特に農民が如何なる共同の祭祀・信仰を有していたかを探求することが、本論文の目的である。

2) 問題関心：前近代の諸文明において、居住空間を共にする人人が共有した祭祀・信仰の分析は、その文明の特質及び社会構造を解明する上で、不可欠の課題であろう。黄河中流域のとある地域に発源し、長年月を経て、いまや東・東南アジアにまで居住領域を拡大した漢民族・華人についても、この命題は当然に成立する。

しかしながら、台湾・香港及び海外華人についての考察が蓄積される一方、大陸の漢民族社会のそれは、人文・社会諸科学の対象とされること極めて稀であり、殆ど白紙の状態に放置されてきた。

その原因は、政治支配に帰せられる。即ち、第一には、1957年に始まる反右派闘争が、社会学・文化人類学・宗教学など「ブルジョア諸学」を禁圧し、それが文化大革命に到って頂点に達したこと、第二には、文革終焉の後も「宗教」と「封建迷信」という優れて政治的（敢言すれば非科学的・恣意的）な区分が強制されることにより、研究者にその考察を禁忌とする知的状況が形成されたことに由来する。それはまた学術状況としては、農村聚落や共同体に関する社会学・地理学・歴史学等の考察の著しい欠落とも通底する。

前近代中国の農村社会及び農民の間に存在する共同性の歴史的考察を研究課題とする申請者は、個人及び全体の研究史における数多の試行錯誤を経て、諸文明に共通する現象、民衆の心性における共同性に辿り着いた。本論文の契機はここに存する。

3) 方法：地方志・随筆雑記・碑刻集を中核とする文献史料は、情報を獲得する最も重要な資料である。世界の前近代諸文明の中で、漢民族世界、特に近世江南デルタは、他に懸絶して豊富な文字資料が残存するからである。それにも拘わらず、主として文人士大夫の手に成る此等文字資料には、農村の「小民」

の祭祀・信仰は、朱子学的教条を以ってすれば唾棄すべき愚昧な活動であるが故に、記録されることが極めて少ない。かつまた民間に自生の宗教職能者をも含めて、民衆が形成する在地の信仰には、神学的言説の集積は皆無に近く、刊行される道・仏の經典集成にも殆ど登場しない。

この欠陥を補うに、現地調査および folklore の収集は必至の作業である。大陸中国では、さなきだに外国学者の漢民族世界の農村調査が厳しく制限される上に、「封建迷信」規定の下、信仰・祭祀の調査は禁忌の対象である。この困難をかい潜って実施した自他の実地考察、及び大陸の「民間文学工作者」の収集した伝説・民話が、第二の重要な情報源となる。(社会主義建設に人民の伝統を有効に活用するという趣旨で、民間文学＝民話収集は、共産党統一戦線部の管掌下に、各地で実施されているが、科学研究者がこれを活用する状況は見られない。)

4) 論旨：①清代の江南デルタ農村(市鎮＝market townを含む)の諸廟に祀られる主神は、関帝・媽祖＝天后・文昌帝君等、全国に著名普遍的な神ではなく、特定地域に限られる地方神であり、彼等は史料では、通常、「土神」と呼ばれている(語義として、一定領域・聚落の守護神たる「土地神」とは、明確に区別される)。彼等には、一個の廟でしか祭られず、文献史料に全く登場しない者から、江南デルタ全域に拡がって崇拜される者まで、大小様々な神が含まれる。それに共通する顕著な特徴は、嘗ては現世に存在していた人が死後に神と為ったとされ、姓名を持ち、しばしば配偶者が従祀され、往々にしてその子孫と称する同姓の人人が現存することである。②人が死後に神と為るに、以下の三個の要件が必要とされる。第一に彼(彼女)は生前に義行が有った。第二に、死後に顕現し、奇跡を行い、国家・民衆に功績・恩恵が有った。第三に、以上の二件が天(宇宙の創造者にして支配者)の地上の代理者＝皇帝によって認定され、勅封されることで、権威付けられる。最後の一件は、無数土神全てに望み得る事ではない。従って、勅封の偽造は普遍的現となる。③奇跡＝靈異は、漢民族世界の時空を超えた普遍的欲求についても果たされはするが、その土神たる特徴として、当時・当地の切実な課題に応える内容が見出される。清代に見出される(のみならず現代にまで残存する)江南の土神は、元代後期～明代初期に形成されるが、その靈異説話の核心は、漕運保護に在る。漕運とは、国家財政を支えた江南デルタで収取された米穀を北方の政治的都・軍事的要地に運送する、国家の財政行為である。元代には海運によったが、請け負った人人は江南で豪富を成し、地方社会に威勢を誇った。明朝は修復成った大運河を利用したが、在地手作にして江南在地社会の支配・指導階層たる郷居地主の課役として「糧長」に任じ、漕運を負担させた。つまり江南地方社会・在地社会の

支配層の欲求に応ずる内容で説話は形成されたのである。最も普及した土神は「総管＝金総管」神であるが、その称号は、元代海運の船団指揮官の職稱に由来する。此等の信仰を「総管信仰」と呼ぶ所以である。④土神の生平・顕現・靈異・封爵等の説話は、巫師によって創出される。彼等は憑依 possession 型のシャーマンと看做し得るが、神の子孫を自称する例が少なくない。彼等は自己に憑依する亡霊＝鬼の權威を高めるべく、先祖を神に仕立て上げる。⑤夙に魏晉南北朝以来、聚落の守護神として、在来の社（自然神。壇で祀る）に代り、「土地」（人格神。廟で祀る）が出現し、都市的聚落の土地として「城隍」が形成された。やがて城隍神は都市を中核とする一定行政領域の守護神、さらにはそも領域の冥界の行政官に変貌する。土地神・城隍神何れも、個々の村落・都市で、姓名など説話を有する特定的人格神であった。体制教学＝朱子学の基本原則を以てすれば、此等は不当な淫祀にほかならない。とりわけ、「胡俗」を一掃すべく、新たな礼制の強制普及に腐心した朱元璋政権は、村落レベルでは土地廟に替えて復古的な「里社壇」の祭祀を命じ、州県については城隍廟を史上初めて国家の祭制に包摂したものの、偶像破壊を命じ、自然神（非人格神）として位牌を置いて祀ることを命じた。あまりにも fundamental で非現実的なこの規範は、即ちに空洞化し、依然として人格神（偶像と廟）を祀る土地廟・城隍廟が普遍的であった。⑥土地廟の具体的考察は、歴史的にも、近現代についても皆無に近い。そもそも村落・聚落の研究が存在しない。この困難な状況の下、限られた史料および現地調査で確認されるのは、江南デルタの地勢は、概ね高郷（海拔3米から4米）と低郷に区分され、前者は孤立荘宅を含む疎村が圧倒的であり、後者は100戸を中心値とする集村が優勢である。聚落形態の差異は、土地廟の範囲＝廟界に反映し、高郷では行政地理的区画である「図」が一個の土地廟の範囲であるのに対し、低郷では図の境界に関係なく、聚落＝村を単位として廟界が設定されている。小農民の第一次的生活空間は、この土地廟の範囲（それも社と俗称される）であった。概ね一個の土地廟は100戸を中心地とする戸数を有する。⑦内的要因として江南デルタ低地開発の終焉、外的には大航海時代、この二個に契機付けられ、江南デルタでは16世紀半ば、商業化が始まり、在地の郷居地主階層は急速に没落し、農村は小農民の世界に変わる。総管信仰はそのパトロンを喪失した。それにも拘わらず、明末以降も総管信仰は生き続け、現代まで（官憲の抑圧に耐えて）それは続いている。漕運保護の靈異説話は小農民にとっては無縁である。収集された現代の説話では、金総管などの土神は漕運担当の下級武官に変貌しており、飢餓に苦しむ貧民に管理下の漕米を独断で支給し、自らは責めを負って投身自殺する。⑧明清社会経済史研究は、16世紀半ば以降、江南デルタの商業化に伴い、水稻を栽培

する小農民も家内手工業に従事し、獲得した貨幣で以って、湖広＝長江中流域から移入される食米を、常時購入するに到った状況を確認してきた。江南の土神は、商業化という社会経済構造の大変動に適応して自らを作り変えた。巫師たちは郷居地主の消滅に対応し、あらたな顧客、龐大な小農民層の切実な願望に応える靈異説話を創出したのである。⑨農村家内手工業の展開はこの地の商業化の重要な構成部分であるが、それは流通の新たな結節点である市鎮 market town の叢生と連関した。小農民の生活空間は、生業・生活の必要に対応して、第一次的空間＝村落＝社の範囲を超え、市場町を中核とする領域（郷脚と呼ぶ地域も有る）にまで拡大する。その祭祀・信仰における表現が、村落レベルの土地廟の上位に位置する鎮城隍廟の形成であり、下位廟＝土地廟から上位廟＝鎮城隍廟に向かう表敬（朝集）と上納（解錢糧）活動の出現である。いずれも中央朝廷に対する地方官の、あるいは県衙への糧長・里長の税糧上納行為に比喻して用語が使われており、市鎮を中核とする地域社会、小農民にとっては第二次的な生活空間の形成が想定されるのである。

5) 課題：資料の欠如、祭祀信仰調査の不許可等により、解明さるべくして未だ遂行されざる課題は多い。土地廟の祭り（社会・土地会）は具体的にどのように行われたのか、それと村落の共同性は如何に連関するのか、そこに如何なる宗教職能者が存在し、どのように機能していたのか、士大夫やその候補者の階層は実際には、此等の祭祀・信仰構造にどのように関与していたのか等等。今後の課題とするが、華南の優秀な青年研究者には、（申請者等の蓄積してきた営為の影響も受けつつ）その考察が始められていることは、明るい展望を抱き得るものであると言える。

論文審査結果の要旨

本論文は中国近世、明清時代を中心として、江南デルタ地域の漢民族の農民がいかなる共同の祭祀・信仰を有していたかを、江南デルタに特有の地域神である「総管」と総称される神々の形成とその変容の歴史のプロセスに焦点を当て、信仰と政治・経済の動向とのかかわりにも目配りしながら、主に文献史料により、現地調査資料をも補足的に用いて解明しようとしたものである。

序章では、問題関心、主題、研究史が手際よく記されている。

第1章では、総管神の来歴について蘇州府常熟県を中心に考察されている。総管神が実在の人物で、姓名を有する人格神であること、総管神のほとんどについては子孫が現存すること、が指摘されている。さらに、神々にまつわる説話の内容として水運、とくに漕運（大運河による水運）に関わる説話が地域的特性として注目されることが指摘されている。

第2章では総管神の来歴について常州府江陰県を中心に考察されている。第1章の論点が検証されるとともに、総管神の子孫に憑霊型のシャーマンである「巫師」がいること、霊異説話がそれら子孫によってつくられること、説話の核心は水運・漕運の保護にありその祖型が江陰県に見られることが指摘されている。

第3章では、第1章・第2章をふまえて、総管信仰の成立の契機と構造が考察されている。すなわち、子孫によって霊異説話が偽造されて神になるという仮説が示され、その説話は生前の義行・死後の顕霊・王朝の勅封という3つの要件から成ること、加えて「総管」の名称が元代の海運船団の指揮官の職称に由来するであろうことが指摘されている。

第4章では、農民の生産・生活の場にどのような地縁的社会集団が存在していたのか、かつ王朝権力がそれといかにかわり、規制し、整序しようとしていたのかを、共同祭祀・信仰の側面から考察している。複数の集落が1つの土地廟を持ち、この土地廟を中心にして成立する地縁的社会集団「社」によって、信仰・祭祀のみならず農村の種々の問題が解決されていたことが指摘される。さらに明初の朱元璋政権が復古的・観念的・非現実的な祭祀制度を強制したが、民間では実際には機能せず、長い歴史をもつ土地廟の祭祀信仰が連続していたことが明らかにされる。

第5章では、16-17世紀の社会経済の大きな変動が民間信仰にいかなる影響を与えたのかを考察されている。まず江南農村から郷居地主が姿を消し、小農民の卓越する社会へと変容し、それにもない神々に変貌し、再生したことが指摘される。申請者は、「巫師」が説話を創出し、飢餓を救うべく国家の米穀を小農民に与える「施米神」という小農民の願いに適応する神に変貌させたと推論する。ついで神々を取り囲む信仰・祭祀の構造にも大規模な変動が発生したことが指摘される。すなわち明末以来、農村家内手工業を重要な構成部分とする商業化がみられ、市鎮（マーケットタウン）が叢生し、そこに城隍廟が建立され、清代にはますます増加していった。市鎮の城隍廟は周辺地域の農村の土地廟の上位に位置し、土地廟から城隍廟に向かい表敬、紙銭の上納が行われた。表敬行為は地方官の中央朝廷への参勤に擬えられ「朝集」と、上納は県への租税の上納行為に比喩して「解錢糧」と呼ばれた。ここに、現世の行政においては出現することのなかった市鎮と農村との統属関係が、祭祀・信仰の場において出現した経過が明らかにされる。

終章では、前章までの考察を整理するとともに、中国民衆の在来信仰の核心にあるシャーマニズムの解明における本論文の意義ならびに残された課題が総括されている。

本論文では一次史料を縦横に駆使し現地調査による資料をも補足的に用いて、歴史的に手堅い論証がなされており、行論は説得力に富む。中国大陸における漢民族の民間信仰の形成過程に関しては、歴史学でも人類学でも従来、研究がほとんどなく、その空白を埋める研究としての意義が大きい。また信仰を政治・経済史のダイナミズムとの関連において考察していることも研究の価値を高めている。

歴史学においてすでに文学博士の学位を有する申請者は、より広い学問分野からの審査を求めて、本論文による学位を申請している。人類学などを含めた観点に立つと、「巫師」が自身の祖先を神に仕立てるといふ仮説については、現地調査なども含めて今後、さらに検証していく必要があり、また、台湾などで指摘される地域単位と守護神との関係の流動性という点についても江南の状況を検討するという課題は残されている。また、論文公開にあたっては、被調査者の実名表記に関する十分な配慮が望まれる。しかし、本論文は歴史学的手法を中心としながら人類学の議論にも目配りした上で、現地調査にもとづく資料をも取り入れて一定の成果を挙げている点では十分に評価でき、上記の問題点は本論文の価値を損なうものではない。

本論文は、中国における民間信仰、ひいては宗教信仰全般、また中国社会の特質とりわけ農民・農村社会の共同性を考える際に、重要な必読文献となり、将来におけるそれらの研究の一層の深化に大きく貢献する研究であると言える。

以上、本論文は高く評価できるものであり、学位を授与するに値すると認定する。